

高等学 校

平成28年度

教育研究員研究報告書

公 民

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	1
III	研究の仮説	3
IV	研究の方法	5
V	研究の内容	6
VI	研究の成果	23
VII	今後の課題	24

研究主題

社会的事象について、多面的・多角的に考察し、 その内容を表現する力を育むための指導と評価の一体化 ～主体的・協働的な学習を用いて～

I 研究主題設定の理由

『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』第2章 2030年の社会と子供たちの未来（文部科学省中央教育審議会 平成28年8月）（以下、『審議のまとめ』と表記）では、「社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となってきて」いる。また、「主体的に学び続けて自らの能力を引き出し自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくために必要な力を身に付け」としている。この指摘を受けて、本研究では、研究員が日頃実践している公民科教育の課題を整理し研究主題を設定することにした。

研究員が日頃の授業実践を通して認識している課題は、思考力・判断力・表現力に関することと、学習評価に関することである。前者については、習得した知識や資料から読み解いた情報などを活用して社会的事象を考察する力と、考察したことを説明する力が十分に育成されていないことである。後者については、評価対象が、生徒の思考力・判断力・表現力に関する評価よりも知識・技能の評価に重きが置かれがちであり、単元終了時の知識・技能の評価とともに、思考力・判断力・表現力の評価を充実させ指導の改善を図る必要があることである。

そこで、評価を工夫することで、思考力・判断力・表現力を一層育成することを考えた。それは、評価の対象を生徒個人の主体的学習で多面的・多角的に考察したこと、この個人の考察を基にグループによる協働学習で考察し表現したものに分けて設定して比較検討することで考察の深まりを確認する。また、評価の見取りの場は個人ワークの場面と協働学習の場面に分けて設定することにした。

以上の考察から、多面的・多角的に社会的事象を読み解くことができない課題や根拠に基づいて社会的事象の説明出来ない課題を解消し、主体的・協働的な学習の前後での生徒の変容に対する評価に基づく授業の改善を図るために、本年度の部会の研究主題を「社会的事象について、多面的・多角的に考察し、その内容を表現する力を育むための指導と評価の一体化～主体的・協働的な学習を用いて～」とした。

II 研究の視点

『審議のまとめ』では次期学習指導要領等では、学習の内容と方法の両方を重視し、子供たちの学びの過程を質的に高めていくことを目指している。つまり、単元や題材のまとまりの中で、「何ができるようになるか。」を明確にしながら、学習内容と、「どのように学ぶか。」という学びの過程を組み立てていくことを重要視している。また、質の高い学びの過程を組み立てていくには、「何を学ぶか。」という学習内容の検討に加えて「何が身についたか。」という学習評価を工夫し、学習評価から把握した授業の改善点を、学習方法の改善に活かして学びの過程を組み立てることが必要だと考えた。

- 1 何ができるようになるか…公民科で育成を目指す資質・能力

『審議のまとめ』によると、次のとおりである。（『審議のまとめ』（別添3-2））

○公民科に求められる「新しい時代に求められる資質・能力」

【知識・技能】

- ・ 諸課題を捉え考察し、国家及び社会の形成者として必要な選択・判断の手掛かりとなる概念や理論の理解
- ・ 倫理的主体、政治的主体、経済的主体、法的主体、様々な情報の発信・受信主体、持続可能な社会づくりの主体に関する理解
- ・ 社会的事象等について効果的に調べまとめる技能

【思考力・判断力・表現力等】

- ・ 諸課題について、事実を基に概念等を活用して多面的・多角的に考察したり、公正に判断したりする力
- ・ 合意形成や社会参画を視野に入れながら、社会的事象や課題について構想したことを、妥当性や効果、実現可能性などを指標にして論拠を基に議論する力

【学びに向かう力・人間性等】

- ・ 人間と社会の在り方に関わる事象や課題について主体的に調べ分かつようとして課題を意欲的に追究する態度
- ・ よりよい社会の実現のために現実社会の諸課題を見だし、その解決に向けて他者と協働して意欲的に考察・構想し、論拠を基に説明・議論することを通して、社会に参画しようとする態度
- ・ 多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される、人間としての在り方生き方についての自覚、自国を愛しその平和と繁栄を図ることや、各国が相互に主権を尊重し各国民が協力し合うことの大切さについての自覚等

本研究では、公民科において育成を目指す資質・能力に対する生徒の現状を知る必要があると考え、「平成28年度都立高等学校入学者選抜学力検査結果」の分析をもとに生徒の現状を把握することにした。

中学校社会科については「多面的・多角的に考察し、課題を解決する力を育成するため」「複数の資料を基に分析することを通して」「適切に表現させたりする」ことの必要性が指摘されている。論述問題については「今後も言語活動をより一層重視し、社会的事象から課題を見出し、多面的・多角的に考察したことについて適切に表現する力を身に付けさせる学習の一層の充実が求められる。」とされている。

これらの課題を解決し、『審議のまとめ』で指摘された公民科において「新しい時代に求められる資質・能力」を身に付けさせるために、資料活用を通して社会的事象に関する情報を読み取りまとめる力や事実を基に概念等を活用して多面的・多角的に考察する力や考察したことを妥当性や効果、実現可能性などを指標に自分の考えを効果的に説明する力を育成する方法について検討を進めた。

2 どのように学ぶか…学びの過程

『審議のまとめ』では、「これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、能動的に学び続けるためには、学びの過程において多様な人との対話で考えを広げたり、教科で身に付けた資質・能力を様々な課題の解決に生かすように学びを深めることが肝要となる。」と指摘している。この指摘を受けて、1で示した公民科に求められる資質・能力を育成するために、生徒同士が対話して多面的・多角的な考察を通じて思考を広げ深める過程が必要となる。そこで、生徒が個人として主体的に考察をする場面と生徒が個人で考察したことを基に、グループ内で生徒同士が意見交換して協働して考察を深めていく場면을学習過程に組み込んでいくこととした。

3 何が身に付いたか…学習評価の充実

「学習評価の改善を、教育課程や学習・指導方法の改善に発展・展開させる。」とした『教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）』（中央教育審議会教育課程企画特別部会 平成27年8月）（以下、『論点整理』と表記。）の指摘を受けて、「何が身に付いたか。」という学習評価から見いだせる授業の改善点を「どのように学ぶか。」という学びの

過程の組み立てに生かして学びの質を高める必要があると考えた。また、主体的・協働的学習の過程を設定するので、「前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているか」（『論点整理』）という点を評価する必要があると考えた。

そこで、主体的・協働的学習の場面を経験することで、思考力・判断力・表現力が深められたかについて確認することにした。また、主体的な学び、対話的な学び、深い学びのアクティブ・ラーニングの視点から授業の改善点を把握するために、社会的事象について多面的・多角的に考察する力と考察したことを表現する力を評価する基準としてルーブリックをそれぞれ設定することにした。前者は生徒個人の考察に対して実施し、後者は生徒同士の協働学習の結果として表現されたものに対して実施し、両者を比較検討することで、生徒の深い学びにつながったかどうかについて、その効果と課題を検証することにした。また、授業の振り返りをするワークシートに自己評価欄・生徒のコメント記入欄を設けて、授業の改善点を把握して、次回の授業実践に生かすことができると考えた。

4 検証授業について

「何を学ぶのか。」について、検証授業で取り上げた内容は、現行の学習指導要領の課題として「主体的に社会の形成に参画する態度が不十分」という『審議のまとめ』の指摘を勘案した。そこで社会との関わりを意識して課題を追究したりする学習活動をとおして、人間としての在り方生き方について選択し判断する内容や持続可能な社会づくりを考える内容とした。

また、公職選挙法等の一部を改正する法律が平成 28 年 6 月 19 日に施行され、満 18 歳以上満 20 歳未満の者も選挙に参加できるようになった。この公職選挙法一部改正を受けて、社会参加に必要な知識、技能、判断力等を育む主権者教育を一層充実させる必要がある。そこで、「主権者としての自覚」について学習する『人間と社会』第 18 章を検証授業の事例として取り上げることにした。また、『人間と社会』の目標は、道徳性を養い、判断基準（価値観）を高めることで、社会的現実を照らし、よりよい生き方を主体的に選択し行動する力を育成することである。この教科の目標は『審議のまとめ』にある新教科『公共(仮称)』の第二項目の「自立した主体として社会に参画し、他者と協働するためにア政治的主体となる私たち」や第三項目の「持続可能な社会づくりの主体となるために」とも連関性があると考え取り上げた。

Ⅲ 研究の仮説

本研究では、次の二つの仮説を立てて検証授業を実施し、その結果について分析する。

- 1 社会的事象について、複数の資料を活用して、主体的・協働的学習を通して多面的・多角的に考察すれば、既習事項と新しい情報が結び付き、論点も整理されるので、根拠に基づいて説明することができる。

教育研究員の課題認識やⅡの 1 の「平成 28 年度都立高等学校入学者選抜学力検査結果」の分析から「複数の資料を基に分析することを通して」「適切に表現させたりする」ことや「多面的・多角的に考察したことについて適切に表現する力」に課題があることが分かった。

そこで、この課題を解決し、Ⅱの 1 で提示した公民科に求められる資質・能力を身に付けさせていくために、教員が単元の基軸となる問いと関連させて問いを設定し、その問いに対して

生徒が考察を深める学習の過程として主体的・協働的な学習を設定することにした。

この学習活動の中で、複数の資料を活用することで、既存の知識と新たな知識が結び付き、主体的・協働的な学習で他者との意見交換が行われ、生徒一人一人の考えが深まり、多面的・多角的考察がなされるので、論点も整理され、根拠に基づいて説明することができると考えた。また、生徒の主体的・協働的な学習を促進するように、生徒の思考の道筋に合わせてワークシートを作成し、段階的に思考が深まるように発問や助言をすることにした。

2 思考力・判断力・表現力等に関する評価規準に基づき、個人ワークに対して実施する思考判断力を評価する評価基準と協働的な学習後に実施する思考したことを表現する力を評価する評価基準に分けて評価基準を設定し比較検討したり、授業の振り返りをするワークシートを見取ったりすることなどから授業の改善点を把握することができる。

仮説1で示した深い学びにつながる主体的・協働的な学習による授業を組み立てて行くには、主体的・協働的な学習による生徒の変化を適切に評価するとともに、生徒の授業の振り返りを基にした分析から把握された改善点を次回以降の授業に生かすことが重要であると考えた。

主体的・協働的な学習を通して、社会的事象について多面的・多角的な考察ができたか、学習内容を適切に表現することができたか等々を評価するために、思考力・判断力・表現力等に関する評価規準に基づき適切に評価基準を設定した。

生徒の学習状況の評価する場面として、主体的・協働的な学習の前後にそれぞれ見取りの場を設けた。また、既習事項に加えて新たな視点や考えをもつことができたかについては協働的な学習の前に実施したループリックと協働的な学習後に実施したループリックとの比較等から評価し、多面的・多角的に捉えられた社会的事象について論理的根拠を踏まえて表現できたかについては、ループリックの他にワークシート等の記述からも評価することにした。また、教員が自らの授業を評価するために、ワークシートの中に生徒自らが授業への取組を自己評価する項目を設けるか、又は、振り返りシートを配布して生徒に自己評価をさせることとした。

IV 研究の方法

1 具体的方策

- (1) 社会的事象に関して設定した問いに対して、複数の異なる資料を活用しワークシートで思考の道筋をまとめながら、主体的・協働的な学習で多面的・多角的に思考したことを根拠に基づいて表現する学習活動を展開する。
- (2) 社会的事象について多面的・多角的に考察する力と考察したことを表現する力を評価する基準としてループリックをそれぞれ設定し、授業の振り返りをするワークシートに自己評価欄・生徒のコメント記入欄を設けて、授業の改善点を把握する。

2 検証方法

社会的事象について多面的・多角的に考察する力と考察したことを表現する力を評価する基準としてループリックをそれぞれ設定し、前者は個人ワークに対して実施し、後者は個人ワークを基にした協働的な学習後に実施して両者を比較検討することで、生徒の思考力・判断力・表現力が高まったかどうかについて検討する。また、生徒が授業中に記入したワークシートの記述内容からも考察の深まりの評価を行うとともに、授業の改善点を見いだすこととした。

V 研究の内容

1 研究構想

全体テーマ **思考力・判断力・表現力等を高めるための授業改善**

高校部会テーマ **新しい時代に求められる資質・能力を育むための、主体的・協働的な学習の指導と評価について**

各教科等における「新しい時代に求められる資質・能力」の定義

知識・技能： 諸課題を捉え考察し、国家及び社会の形成者としての必要な選択・判断の手掛かりとなる概念や理論の理解
倫理的主体、政治的主体、経済的主体、法的主体、様々な情報発信・受信主体、持続可能な社会づくりの主体に関する理解
社会的事象等について効果的に調べまとめる技能

思考力・判断力・表現力等： 諸課題について事実を基に概念等を活用して多面的多角的に考察したり構成に判断したりする力、合意形成や社会参画を視野に入れながら、社会事象や課題について構想したことを、妥当性や効果、実現可能性などを示標にして論拠を基に議論する力

学びに向かう力、人間性等： 人間と社会の在り方に関わる事象や課題について主体的に調べ分かろうとして課題を意欲的に追究する態度
よりよい社会の実現のために現実社会の諸課題を見出し、その解決に向けて他者と協働して意欲的に考察・構想し、論拠を基に説明・議論することを通して、社会に参画しようとする態度
多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される、人間としての在り方生き方についての自覚、自国を愛しその平和と繁栄を図ることや、各国が相互に主権を尊重し各国民が協力し合うことの大切さについての自覚等

高校部会テーマにおける現状と課題

現状： 1 新たな情報を既習事項と結びつけることができないので、学習内容を深く理解することが十分できていない。
2 複数の資料を活用して社会的事象を考察することが十分できていない。
3 思考力・判断力・表現力等を育むための評価が十分行われてはいない。

課題： 1 既習事項と新たな知識同士を関連付ける学習活動を充実させる必要がある。
2 様々な資料を提供して、読み取る機会や生徒同士が意見交換の場を設けて考察する必要がある。
3 思考力・判断力・表現力等の評価規準及び評価基準を適切に作成し授業の工夫改善を図る必要がある。

高等学校地理歴史・公民部会(公民)主題

**社会的事象について、多面的・多角的に考察し、その内容を表現する力を育むための指導と評価の一体化
～主体的・協働的な学習を用いて～**

仮 説

- 1 社会的事象について、複数の資料を活用して、主体的・協働的な学習を通して多面的・多角的に考察すれば、既習事項と新しい情報が結び付き、論点も整理されるので、根拠に基づいて説明することができる。
- 2 思考力・判断力・表現力等に関する評価規準に基づき、個人ワークに対して実施する思考判断力を評価する評価基準と協働学習後に実施する思考したことを表現する力を評価する評価基準に分けて評価基準を設定し、比較検討したり、授業の振り返りをするワークシートを見取ったりすることなどから授業の改善点を把握することができる。

具体的方策

- 1 社会的事象に関して設定した問いに対して、複数の異なる資料を活用しワークシートで思考の道筋をまとめながら、主体的・協働的な学習で多面的・多角的に思考したことを根拠に基づいて表現する学習活動を展開する。
- 2 社会的事象について多面的・多角的に考察する力と考察したことを表現する力を評価する基準としてルーブリックをそれぞれ設定し、授業の振り返りをするワークシートに自己評価欄・生徒のコメント記入欄を設けて、授業の改善点を把握する。

検証方法

社会的事象について多面的・多角的に考察できるようになったか、その意味や意義を表現できたかについて、協働的な学習の前後のルーブリックによる評価の比較や、ワークシートや振り返りシートの記述内容を活用して検証する。

2 実践事例Ⅰ 現代社会

教科名	公民科	科目名	現代社会	学年	1 学年
-----	-----	-----	------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 (2) 現代社会と人間としての在り方生き方

ア 青年期と自己の形成

イ 使用教材 『最新現代社会』（実教出版）

(2) 単元（題材）の目標

生涯における青年期の意義を理解させ、自己実現と職業生活、社会参加、伝統や文化に触れながら自己形成の課題を考察させ、現代社会における青年の生き方について自覚を深めさせる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
青年期や自己形成に関する諸資料を様々なメディアを通して収集し、生涯における青年期の意義、社会参加などの知識を身に付けて、自己形成のために効果的に活用している。	自己形成の課題や青年の生き方について、幸福、正義、公正などを用いて多面的・多角的に考察し、社会の変化や様々な立場、考え方を踏まえ公正に判断して、その過程や結果を様々な方法で適切に表現している。	自己形成の課題について主体的に調べ分かれようとして課題を意欲的に追究している。 現代社会に生きる青年としての生き方について学んだことを社会生活に生かそうとしている。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（3時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
【基軸となる問い】現代社会に必要な愛とは何か。					
第1時	【ねらい】古代ギリシア人の思想を通してよく生きるとはどのようなことかについて考察できる。				
	【小さな問い】よく生きるとはどのような生き方か。				
第2時	・よく生きるとは何かなどを探究したギリシアの思想を自己の課題とつなげて理解する。	●			・よく生きるとは何かなどを探究したギリシアの思想を自己の課題とつなげて理解し、人格の形成を生かす知識として身に付けている。(観察、ノート、確認テスト)
	【ねらい】世界の宗教の特色について理解し、その知識を身に付けることができる。				
第2時	【小さな問い】世界の宗教に共通するものは何か。				
	・世界の宗教における考え方を自己の課題とつなげて理解する。	●			・世界の宗教における考え方を自己の課題とつなげて理解し、人格の形成に生かす知識として身に付けている。(観察、ノート、確認テスト)
第3時 (本時)	【ねらい】自己形成の課題を考察させ、現代社会における青年の生き方について自覚を深めることができ				
	【小さな問い】あなたはどのように環境問題に関わっていますか。				
第3時 (本時)	・「愛」に関するコンセプト・マップを作成する。 ・「どのように環境問題に関わっていくか」をテーマにレポートを作成する。		●	●	・コンセプト・マップを用いて、愛の在り方の意味や特色を考察している。(観察、コンセプト・マップ) ・レポートの中で、社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて構想したことを根拠に基づいて説明している。(観察、レポート)

(5) 本時（全3時間中の3時間目）

ア 本時の目標

自己形成の課題を考察させ、現代社会における青年の生き方について自覚を深めさせる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(ア) 複数の資料を活用して、現代社会における問題（環境問題）を源流思想（世界の宗教）における愛の在り方の視点から捉え、コンセプト・マップを活用して、多面的・多角的に考察すれば、既習事項と新しい情報が結び付き、論点が整理される。

(イ) (ア)の結果、「どのように環境問題に関わっていくか。」についてコンセプト・マップを活用して、根拠に基づいて説明することができる。

(ウ) 思考力・判断力・表現力等に関する評価規準に基づき、適切に評価規準を設定し、授業の振り返りをすれば、改善点が明らかになり授業改善が進む。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容の概要を把握する。ねらいを説明し、それに付随する小さな問いを発問する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の目標や授業内容を理解させ、学習の動機を付けさせる。 	
	【ねらい】自己形成の課題を考察させ現代社会における青年の生き方について自覚を深めることができる。		
	【小さな問い】あなたはどのように環境問題に関わっていきますか		
展開 40分	<p>発問①</p> <p>「源流思想における愛とは何だろうか。」</p> <p><個人ワーク></p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料を複数提示した上で「キリスト教」、「仏教」、「儒教」についてまとめる。 <p><グループワーク></p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人でまとめたものを基にグループで意見交換しながら個人でコンセプト・マップを作成する。 ・源流思想に関係するものをリンクさせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンセプト・マップを作成する際には、既習事項と新しい情報を結び付けられるように、机間指導をしながら意識的に発問を繰り返していく。 ・資料の解説を行い、スムーズにコンセプト・マップに作業が進むように促していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンセプト・マップを用いて、源流思想における愛の在り方の意味や特色を考察している。（観察、コンセプト・マップ） <p>ルーブリックAで評価</p>
	<p>発問②</p> <p>「環境問題の解決に向けて必要な愛とは何か。」</p> <p><グループワーク></p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代社会の問題の中から、環境問題を取り上げ、この解決に向けて必要な愛（考え方）とは何かを、発問①で考えた源流思想における愛の在り方から見いだしてみる。 ・発問①で作成したコンセプト・マップに上書きする形で、グループでコンセプト・マップを作成する ・環境問題と源流思想における愛の在り方に関係するものをリンクさせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現代社会の様相を踏まえつつ、自分の考えを論理的に説明することができるような発問をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンセプト・マップを用いて、源流思想における愛の在り方の視点から現代社会の問題を考察している。（観察、コンセプト・マップ）
	<p>発問③</p> <p><個人ワーク></p> <p>「あなたはどのように環境問題に関わっていきますか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成したコンセプト・マップを踏まえて、発問の課題を250字程度にまとめていく。 		<ul style="list-style-type: none"> ・250字作文の中で、社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて構想したことを根拠に基づいて説明している。（観察、レポート） <p>ルーブリックBで評価</p>

ま と め 5 分	本時の振り返り ・「本時の振り返りシート」を用いて学習内容を確認する。	・作成したコンセプト・マップを踏まえて、250字程度の作文が書けたかどうか、確認と評価を生徒一人一人に促す。	
-----------------------	--	--	--

(6) 問いの設定理由

本単元は高等学校学習指導要領 現代社会 「(2) 現代社会と人間との在り方生き方 ア 青年期と自己の形成」に該当し、内容については「生涯における青年期の意義を理解させ、自己実現と職業生活、社会参加、伝統や文化に触れながら自己形成の課題を考察させ、現代社会における青年の生き方について自覚を深めさせる。」とされている。

本時は、倫理的分野の側面における源流思想に共通する「愛」の在り方が、現代社会が抱える問題—環境問題—といかに関わるのかを考察させていく。そのことを通じて、「自己形成の課題を考察させ、現代社会における青年の生き方について自覚を深めさせる。」ことがねらいである。本単元の総括として、この青年期の生き方の一つに源流思想による現代社会の課題解決があることを意識させるため「どのように環境問題に関わっていくか。」を小さな問いとして設定した。

(7) コンセプト・マップについて

多面的・多角的に考察し論点が整理できたかどうかを判断するために、今回はコンセプト・マップというツールを用いた。コンセプト・マップは、コンセプト(概念)間の関係を、ノードとリンクとリンク語を使って描いた図であり、通常、中心に焦点質問が置かれる。ノードは、焦点質問に対応した語句で構成され、一般的に枠で囲まれる。リンクは関連するノードとノードをつなぐ棒線であり、リンク語はリンクされた関係性を端的に説明するためにリンク脇に用いられた語句である。

コンセプト・マップをグループワークとして検証授業に取り入れた理由は、まず、コンセプト・マップを利用することで、知識・理解が可視化され、社会的事象についての論点を整理し、思考の道筋をまとめることができるのではないかとということが挙げられる。また、グループワークを通して他者と知識や理解を交流させることができるようになり、主体的・協働的学習には非常に有効だと考えたためである。

(8) 本時の振り返り

ア ループリックによる評価結果

提示した資料は、キリスト教、仏教、儒教におけるそれぞれの愛が連想できるものと、現代社会の問題として環境問題に関連して国連気候変動枠組条約締結国会議で採択されたパリ協定発効に関する複数の新聞社の記事である。源流思想(世界の宗教)における愛について整理し、そこにパリ協定発効に関する記事を考えて時に関連性を見いだせるかがポイントとなる。すなわち「持続可能な未来」を目指していくためには、独りよがりな発想ではなくて他者への愛情が必要不可欠であるという観点である。

個人ワークによるコンセプト・マップによる評価結果(表1)については、多面的・多角的に考察し論点が十分に整理できた生徒は8名であった。

次に、根拠に基づいて説明することができるかどうかについてグループワークを経た後の個人ワークで250字程度にまとめた文章によって評価していくことにした。その結果(表

2)は以下のとおりである。

表1 【「ルーブリックA」…多面的・多角的に考察する力を評価するルーブリック】

評価規準	評価基準		
	3 (十分満足できる) 8名	2 (概ね満足できる) 20名	1 (努力を要する) 5名
コンセプト・マップを用いて、源流思想における愛の在り方の視点から現代社会の問題を考察している。	授業で使われたコンセプトが豊富で、その使い方が適切であり、現代社会の問題との関連性を適切に見いだしている。	提示されたコンセプトは、ほぼ適切に用いているが、現代社会の問題との関連性が不十分である。	コンセプトが少ない、又は不適切なコンセプトが数多く含まれており、現代社会の問題との関連性がない。

表2 【「ルーブリックB」…表現する力を評価するルーブリック】

評価規準	評価基準		
	3 (十分満足できる) 12名	2 (概ね満足できる) 16名	1 (努力を要する) 5名
源流思想における愛の在り方の視点から現代社会の問題を考察し、その解決に向けて構想したことを根拠に基づいて説明している。	源流思想における愛の在り方の視点が複数あり、現代社会の問題と関連させて考察し、その解決に向けて根拠に基づいて構想したことを説明している。	源流思想における愛の在り方の一つの視点から、現代社会の問題と関連させて考察し、その解決に向けて根拠に基づいて構想したことを説明している。	源流思想における愛の在り方の視点がないか、現代社会の問題と関連させて考察できていない。

根拠に基づいて説明することができたとする生徒のうち、「十分に満足できる。」に達した生徒は12名となり、協働的な学習により個人ワークの段階よりも思考が進展したと考えられる。

イ アンケートの結果

本時の振り返りシートの中で行ったアンケートでは、コンセプト・マップを作ることで、自分の考えが知識と知識が関連付けられて目に見えるようになり、自分の考えが整理されたこと、また、作文にするときに構想図のように使うことができたので書きやすかったことなど学習方法としても有効なことが分かった。この可視化されたコンセプト・マップを使用して生徒の間だけでなく教員と生徒の間でも意見交換をすれば、更に考察の深まりにつながると思われるので、時間配分の工夫をしたい。

ウ 仮説の検証

(ア) 仮説1の検証

仮説1については、授業の中で具体的方策1・2に準じて授業を展開した。ルーブリックAの「コンセプト・マップを用いて、源流思想における愛の在り方の視点から現代社会の問題を考察する。」ことについては、コンセプト・マップというツールの長を生かして、まず、主体的・協働的な学習を行うことができた。次に、概ね満足できる評価が多いこ

とから、コンセプト・マップのグループワークを通じて可視化された知識・理解を基に社会的事象についての論点が整理でき、思考の道筋をまとめることができたといえるだろう。

ループリック B の「源流思想における愛の在り方の視点から現代社会の問題を考察し、その解決に向けて構想したことを根拠に基づいて説明する。」ことについては、「十分満足できる。」評価が多かった。このことから、事前に多面的・多角的な考察により論点が整理されていれば、根拠に基づいて説明することができると推察される。

以上のように、具体的方策 1・2 から、仮説の有効性が確認できたと考えられる。

(イ) 仮説 2 の検証

仮説 2 については、具体的方策 2 に準じて、授業のまとめについてアンケートを用いて検証しようと試みた。アンケートにおいて「できなかった。」と回答した生徒はループリック B で努力を要すると評価した生徒と同じ生徒であることが分かった。改善点としては、この「できなかった。」と回答した生徒たちをいかにして高次の評価へと高めるかということになる。適切な本時のねらいの説明、小さな問いをはじめとする発問の的確さ、資料の読み取り方の分かりやすい説明など改善に努める必要がある。

エ 成果と課題

(ア) 成果

仮説の検証からも明らかなおり、コンセプト・マップは、グループで作成すれば、その過程を通して対話が進み主体的・協働的学習を行い、既習事項を概念ごとに整理するのに有効なツールであることが分かった。同様に、自らの意見を 250 字程度の作文でまとめることについても主体的に表現させる手段であるといえる。

(イ) 課題

コンセプト・マップのグループワークでは、課題に対する取組にグループで差が見られた。作業内容を的確に理解していたグループでは、話し合いが活発に進められた一方で、作業内容を把握した生徒が他の生徒に伝える力が十分でないグループは共通理解するのに時間を要し、取組状況が芳しくなかった。このことは、授業のねらいや作業内容を適切に認識させて学ぶ意欲を生徒から引き出さないと、生徒の間に学び合いが生じても有効に機能しない結果とも推察できる。

また、評価に関する改善点として、今回はループリックのレベル分けの標語については、定量的な区分にしたが、コンセプト・マップにおいてリンク語とリンク語の関連付けの適切さなどの質的区分の場合について検討を進めていく必要がある。確かに、学習の振り返りとしてアンケートを実施すると、本時の授業の課題が見えてくるが、今後は単元としての改善点までも発見できるように質問項目を考え改善していく必要がある。

3 実践事例Ⅱ 政治・経済

教科名	公民科	科目名	政治・経済	学年	第3学年
-----	-----	-----	-------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 (2) 現代の経済
 イ 国民経済と国際経済
- イ 使用教材 『高校政治・経済』（実教出版）

(2) 単元（題材）の目標

- ① 国際経済についての見方や考え方の基礎となる貿易の意義、為替相場や国際収支の仕組み、国際協調の必要性を理解する。
- ② 身近で具体的な事例から、国際経済の安定と成長が国民福祉の向上と相互に関係していること、また国民生活に関連していることについて考える。
- ③ 外国為替が与える諸課題について、その解決に向けて他者と協働して意欲的に考察し、考察した内容を基に説明することができる。
- ④ 国民経済と国際経済について多面的・多角的に考察し、振り返りを行い、学んだことの意味を理解することで、身に付けた見方・考え方を新たな課題の解決に生かすことができる。

(3) 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
貿易の意義や対外経済取引に伴う通貨間の売買の必要性、為替相場、国際収支の仕組みを理解している。 社会的事象に関する諸課題の解決に必要な情報を効果的に収集、読み取り、まとめることができる。	国際経済から課題を見だし、国際経済の特質を多面的・多角的に考察できる。 適切な資料・内容を適切に選択し、社会的事象等について自分の考えを効果的に説明できる。	社会的事象等について、追究したり探究したりするとともに、よりよい社会の実現を視野に入れ社会に見られる諸課題の解決に関わろうとしている。 国際経済に関連して身に付けた見方・考え方を新たな問いに生かしている。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（4時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
【基軸のなる問い】私たちの生活と国際経済はどのようなつながりがあるのか。					
第1時	【ねらい】貿易の背景、国際収支について理解する。また、国際経済の仕組みと私たちの暮らしと関連付けて考察することができる。				
	【小さな問い】貿易の背景、国際収支から、私たちの暮らしと関連付けて考察してみよう。 ・導入で取り上げた商品から貿易、国際収支について考える。 ・ワークシートに本時の国際経済の仕組みについて考察したことをまとめる。		●		ついて理解している。 ・貿易の意義について私たちの暮らしと関連付けて考えることができる。

第2時	<p>【ねらい】 新聞記事の平均株価と外国為替相場について、円とアメリカドルの為替チャートから、円安・円高について理解し、現状について考察することができる。</p>				
	<p>【小さな問い】 新聞記事の外国為替相場から、今の日本は円高なのか、円安なのか考えてみよう。</p> <p>・円高・円安について確認する。</p> <p>・ワークシートに外国為替の仕組みと円高・円安となる要因と現在の為替の動きについて考えたことをまとめ、授業の振り返りをする。</p>	●		●	<p>・円安・円高について理解できている。</p> <p>・対米ドルの為替チャートから円安と円高について読み取り、現在の為替の動きについて、多面的・多角的に考察することができる。</p>
第3時 (本時)	<p>【ねらい】 確定拠出年金を例にして、主体的・協働的学習を行い、為替相場の影響について理解を深め、今後の実社会の影響や課題について、多面的・多角的に考察する。</p>				
	<p>【小さな問い①】 資料を参考にして、確定拠出年金の資産配分を考えてみよう。</p>				
	<p>【小さな問い②】 今日の授業を振り返って、外国為替の変動が今後の私たちの社会に与える影響や課題について家計、企業、政府の視点で考えてみよう。</p> <p>・40年後の為替相場から、配分した資産がどのように変化したかを確認する。</p> <p>・年金運用の結果が、外国為替からどのような影響を受けたのか考察し、意欲的に取り組んでいる。</p> <p>・振り返りを行い、老後の大切な資金となる年金の運用について考察し、外国為替の動きが家計にも大きな影響を与えていることを考察する。</p>		●	●	<p>・確定拠出年金について、根拠のある資産配分を行っている。</p> <p>・外国為替の変動が与える実社会への影響や課題について意欲的に取り組んでいる。</p> <p>・振り返りにより、年金の運用が外国為替の動きと密接に関わることについて多面的・多角的に考察することができる。</p>
第4時	<p>【ねらい】 日本の企業が国際経済に与える影響と、日本が果たす役割について多面的・多角的に考察する。</p>				
	<p>【小さな問い】 日本の企業が国際経済に与える影響とは何か、また、日本が果たす役割は何か。</p> <p>・導入で示した企業の中から関心のある企業を選び、その会社の特徴と国際経済に与える影響について理解する。</p> <p>・企業のあるべき姿と国際経済の安定と成長のために果たすべき日本の役割について多面的・多角的に考察する。</p>	●		●	<p>・日本内外で活動する日本企業から国際経済の概要を理解している。</p> <p>・企業を例に、国際経済の安定と成長のために果たすべき日本の役割について多面的・多角的に考察することができる。</p>

(5) 本時 (全4時間中の3時間目)

ア 本時の目標

(7) 将来の年金について興味をもち、変動相場制と国民生活の関連性について理解させる。

【小さな問い①】資料を参考にして、確定拠出年金の資産配分を考えてみよう。

(イ) 確定拠出年金（日本版 401K）を例に変動相場制が私たちの生活にどのような影響を与えるか、多面的・多角的に考察させる。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(ア) 確定拠出年金の資産配分について、複数の資料を活用して、多面的・多角的に考察することができる。

(イ) 他者と協働した学習について、学習の振り返りを行い、学習への理解を深め、外国為替の仕組み、年金の運用などの実社会の課題について表現することができる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習事項を確認する。 ・ICT 機器を使用して提示した、本時の授業のテーマ『年金制度から外国為替の影響を考える』と授業の目標を理解する。 ・年金の仕組みについて確認する。 ・確定拠出年金の内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを配布する。 ・ICT を使用し、円安・円高の基本的な動きについて確認させる。 ・年金の資産運用をすることだけが目標にならないよう、外国為替の理解を深めることを強調する。 	
展開 30分	<p>【小さな問い①】資料を参考にして、確定拠出年金の資産配分を考えてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・確定拠出年金の資産配分を考える個人ワークを行う。 ・個人ワーク後、グループになり、資産配分について一人ずつ発表を行う。 ・発表後、個人の意見を参考にグループで確定拠出年金の資産配分を考える。 ・グループ毎に確定拠出年金の資産配分を発表する。 ・各グループの発表を聞いた後、資産配分の変更したいグループは変更する。 ・40年後の為替相場を提示し、グループで配分した資産がどのように変化したかを確認する。 ・配分した年金資産がどのような影響を受けたのかを考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導を行い、生徒の学習への取り組み状況を確認する。 ・ICT とプリントで各チャート(日本円、米ドルの為替チャート、日経平均株価チャート、日本の輸出企業の株価チャート、外国企業の株価チャート)を提示して、個人ワーク及びグループワークをさせる。 ・想定される未来(40年後)を三つ用意し、代表の生徒に一つを選ばせる。その選んだ40年後の外国為替の変動を受けて、年金資産がどのように変化したかを確認させる。 ・未来の状況により、自分の年金運用の結果が、外国為替にどのような影響を受けたのかをワークシートにまとめさせる活動では、根拠を踏まえて考察させるようにする。。 	<p>ループリック A の活用 ワークシートの記述内容</p> <p>発表の内容</p> <p>ワークシートの記述内容</p>

ま と め 10 分	【小さな問い②】今日の授業を振り返って、外国為替の変動が今後の私たちの社会に与える影響や課題について家計、企業、政府の視点で考えてみよう。		
	・振り返りを行い、老後の大切な資金となる年金の運用について考察し、外国為替の動きが家計・企業・政府に大きな影響を与えていることを考察する。 ・本時の授業の自己評価。	・本時の振り返りを行い、【小さな問い②】について、ワークシートに記入させる。	(机間指導による観察、質問などに対する発言、ワークシートの記入・提出) ルーブリック B の活用

(6) 問いの設定理由

本単元は高等学校学習指導要領解説公民編第3節 政治・経済－2 内容の「(2) 現代の経済 イ国民経済と国際経済」に該当し、その扱いについては「貿易の意義、為替相場や国際収支の仕組み、国際協調の必要性や国際経済機関の役割について理解させ、グローバル化が進む国民経済の特質について把握させ、国際経済における日本の役割について考察させる。」とされている。例えば、平成20(2008)年に起きたリーマンショックの事例のように日本経済がグローバル化し、国際経済の影響を大きく受けることをマクロとミクロの両視点をもって把握させることを通して、国民経済と国際経済の基本的な見方や考え方を身に付けさせるために、基軸となる問いを「私たちの生活と国際経済はどのような繋がりがあのか」とした。

本時においては、年金制度を活用して、前時に扱った外国為替相場の理解を深め、家計・企業・政府に与える外国為替の影響や課題について説明できることを目標とした。復習の資料を活用し確定拠出年金の資産配分する場面では、小さな問いを「資料を参考にして、確定拠出年金の資産配分を考えてみよう。」とした。外国為替の動きが家計・企業・政府に大きな影響を与えていることを考察する場面では、小さな問いを「今日の授業を振り返って、外国為替の変動が今後の私たちの社会に与える影響や課題について家計、企業、政府の視点で考えてみよう」とした。

(7) 単元の振り返り

ア ルーブリックによる評価結果

提示した「日本円、米ドルの為替チャート」「日経平均株価チャート」「日本の輸出企業の株価チャート」「外国企業の株価チャート」の資料を活用させた個人ワークの結果(表3)は以下のとおりであった。

表3 【「ルーブリックA」…多面的・多角的に考察する力を評価するルーブリック】

評価規準	評価基準		
	3 (十分満足できる) 6名/16.6%	2 (概ね満足できる) 18名/50%	1 (努力を要する) 12名/33.3%
確定拠出年金について複数の資料を考察し、活用して根拠のある資産配分を行っている。	二つ以上の資料を考察し、根拠に資産配分を行っている。	一つの資料を考察し、根拠に資産配分を行っている。	資料を考察せず、資産配分を明確に示すことができていない。

外国為替の影響が実社会に与える影響や課題についてワークシートの振り返りを使い表現させた結果、以下の通りとなった。

表4 【「ルーブリックB」…表現する力を評価するルーブリック】

評価規準	評価基準		
	3 (十分満足できる) 9名/25%	2 (概ね満足できる) 20名/55.5%	1 (努力を要する) 7名/19.4%
振り返りにより、外国為替の変動が今後の実社会に与える影響や課題について、家計、企業、政府の視点で説明することができる。	学習した内容を生かし、外国為替の変動が実社会に与える影響や課題について、家計、企業、政府の視点で説明することができる。	家計の立場で、円高、円安の為替変動が今後の年金運用に与える影響について説明することができる。	外国為替と年金運用の関連性や為替変動について、説明することができない。

資料の活用、主体的・協働的学習、多面的・多角的な考察を引き出す小さな問いによって「外国為替の変動が今後の実社会に与える影響や課題について家計、企業、政府の視点で説明する」ことができた生徒は、ルーブリックAに比べ11%増加した。この結果から、既習事項と新しい情報が結び付いて、考察が深まり、論点も整理され、根拠に基づいて説明ができるようになったと考えられる。

イ アンケート結果

「年金の運用について為替を考慮しながら資産配分を考えることができた。」「クラスメイトとの異なる考えを聞くことができて参考になった。」など、生徒の評価からは主体的・協働的な学習の効果が確認され、約8割の生徒がグループワークの結果、金融資産の配分を変更している。このことから、グループワークを通して、他の人の考えを理解したことで各自の考えの変容が引き出され、新しい見方・考え方などに気付き、多面的に考えることができ、問いの本質に気付き、自己の考えを形成することができたといえる。

ウ 仮説の検証

仮説1については、具体的方策1に準じて授業を展開した。ルーブリックA「確定拠出年金について、複数の資料を活用して根拠のある資産配分を行っている。」について、個人ワークでは資料を活用して資産配分を行うことができた生徒は13%であったが、主体的・協働的な学習を行うことにより、33%の生徒が「概ね満足できる。」評価となった。主体的・協働的な学習を行うことによって、個人では気付かなかった複数の資料の見方・考え方を発見し多面的な考えが加わることにより、資産配分を決定することができたと考えられる。

また、既習事項と新しい情報を結び付け、論点整理を行い、根拠に基づいて説明することができるかを評価するルーブリックBでは、52.7%の生徒が概ね満足できる評価となった。主体的・協働的な学習を行ったことにより、生徒同士で意見交換を行い、発表を行うことで深い学びになり、年金制度を活用し、家計、企業、政府の視点にたつて外国為替の与える影響や課題について多角的に考えることができたと推察できる。以上のように、具体的方策1から、仮説を確認できたと考えられる。

仮説2については、具体的方策2により、教員は生徒の学習のつまづきを発見すること

ができ、生徒の思考力・判断力・表現力等が目標に到達するための手立てを考えることができる。つまり、この効果的な評価基準の設定により、生徒理解がさらに深まり、教材開発の創意工夫や指導方法の見直しにつながると考えられる。

エ 成果と課題

(ア) 成果

成果の第一に、個人ワークでは気付かなかった見方が、協働的な学習によって生徒同士の意見交流によって、既習事項と新しい情報が結び付き、論点を整理することができた。また、根拠に基づいて説明する場面においても、主体的・協働的な学習により、深い学びにつながったことが確認できた。第二に、複数の資料を使用することにより、生徒が多面的に考察する力が身に付いていくことが確認できた。具体的には、学校や生徒の実態に合わせて、提示資料の数や種類を変更することで、GPIFの年金運用と生徒に提示した金融資産での乖離をなるべく小さくし、実社会に近いツール（国債、外国債券など）を使い提示することでより深い学びにつながると考える。第三に、具体的方策2で確認できたように思考力を評価するルーブリックと表現力を評価するルーブリックの比較検討をすることと生徒の自己評価を設けることにより、生徒の変容を読み取ることができ、授業の改善点を把握することができた。これにより、個の生徒に応じた学びへの指導工夫や学習環境を設定することにより、生徒の学習活動が活発させることができる。

(イ) 課題

今回の検証授業では、年金制度を活用し、外国為替が与える影響について思考・判断・表現する学習活動であった。しかし、一部の生徒がこの学習から人生や社会に生かそうとする学びに向かう力や自らの振り返りを意味付け、授業で身に付けた資質・能力を自覚することが不十分であったと考えられる。検証授業では時間配分に苦慮した部分もあり、生徒たちに思考・判断・表現させる場면을効果的に設定し、対象生徒に対する丁寧な指導が十分ではなかったことが挙げられる。

この改善策としては、学校・生徒の実態に即した教材研究・授業展開を行い、振り返りや意味付けることを繰り返し行い、生徒同士共有させることが重要であると考え。この点から、ワークシートに振り返りを行うことのできる生徒コメント欄・自己評価欄を設定し、活用することにより生徒の実態や学習到達度の確認を行えることから授業改善につながることができると考える。生徒が習得した概念や考え方を生かし、新しい情報と結び付け、実社会に活用できる資質・能力の育成ができるよう、今後も更なる授業改善に取り組むことが必要である。

4 実践事例Ⅲ 人間と社会

教科名	人間と社会	科目名	人間と社会	学年	1 学年
-----	-------	-----	-------	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 18 章 主権者としての自覚

イ 使用教材 人間としての在り方生き方に関する教科『人間と社会』東京都教育委員会
「有権者になることについて考えてみよう」リーフレット

東京都教育委員会（平成 28 年 6 月配布）

(2) 単元（題材）の目標

18 歳選挙権が付与されたことを自覚し、社会連帯、公正に対する自己の考えを深め、公共的な事柄に主体的に参画する能力を育成する。

(3) 単元の評価規準

- ① 民主政治における個人と、国家の在り方や民主社会に主体的に生きる人間の在り方について考察することができる。
- ② ケーススタディを基に、高校生の立場・主張を理解するため、複数の資料を関連させながら、適切に読み取ることができる。
- ③ 同年代の若者が主権者としてどう行動すべきか、発表活動や意見交換、複数の資料を活用して、主権者として社会とどのように関わって生きていきたいのか、多面的・多角的に考察・表現している。

(4) 単元（題材）の指導と評価の計画（2 時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点			評価規準 (評価方法など)
		知	思	主	
	【基軸となる問い】国を動かす主権をもつということは私たちにとってどのようなことなのか。				
第 1 時 (本時)	【ねらい】選挙権年齢が 18 歳に引き下げられた理由を考えるとともに、様々な高校生の立場に立ち意見交換することを通して、主権者であることについて学ぶ。				
	【小さな問い】選挙権年齢が 18 歳に引き下げられた理由は何か。				
	<ul style="list-style-type: none"> ・学習する内容の概要を理解する。 ・教科書中の Q1 「選挙権年齢が 18 歳に引き下げられた理由」について、複数の資料を用いながら意見交換する。 ・教科書中のケーススタディを用いて、各グループ毎に意見交換を行う。 	●	●		<ul style="list-style-type: none"> ・諸資料を活用して、本単元についての興味関心をもつことができたか。 ・課題を多面的・多角的に捉え、自分なりの考えをもち、主張することができたか。 ・グループワークを通して、他者と協働で意見交換できたか。

	【基軸となる問い】あなたは主権者として、社会とどのように関わって生きていきたいのか。			
第2時(本時)	【ねらい】前時に考察した事柄を踏まえて、同年代の若者が主権者としてどう行動すべきか、主権者としての自覚を養う。			
	【小さな問い】主権をもつということはどのようなことか。			
	<ul style="list-style-type: none"> 前時にまとめた事柄を踏まえ、「主権をもつ自分たちと同年代の子供たちが、更に政治参加するようにするためにはどうしたらよいか。」について考え、グループ毎に意見交換・発表をする。 発表毎に質問時間を設け、なぜそのように考えるのか、他者の意見を聞く。 発表終了後、グループ毎に振り返りを行い、主権者としてどのようなことを大切にして生きていくのか考察する。 			●
		●		<ul style="list-style-type: none"> 考えの理由やそのよい点などを積極的に他者に説明している。 自分の考えをワークシートに適切に表現しているか。

(5) 本時(全2時間中の1時間目)

ア 本時の目標

(ア) 国を動かす主権をもつということは、あなたにとってどのようなことか、主権者として自分の考えを形成していく。

(イ) グループワーク等の主体的・協働的学習を通して、根拠をもって自分の考えを説明する力を養い、主権者としての資質を身に付ける。

イ 仮説に基づく本時のねらい

(ア) 選挙権年齢が引き下げられた理由について、複数の資料を活用して多面的・多角的に考察することができる。

(イ) ケーススタディの各高校生の立場・主張について、複数の資料を活用して多面的・多角的に考察することができる。

(ウ) 主体的・協働的な学習や発表活動を通して、学習の振り返りを行い、学習への理解を深め、主権者として公共的な事柄に主体的に参画し自らの考えを表現することができる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> 「本章で考えること」を通して、本章で学習する内容の概要を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に対してこの章の学習内容と身に付く力を簡単に理解させる。 	
	【小さな問い】選挙権年齢が18歳に引き下げられた理由は何か。		
	<ul style="list-style-type: none"> 「1(1)ア」について、選挙権年齢が18歳に引き下げられた理由について主体的個人ワークとして考えをまとめ、さらに、ペアワーク、グループワークで意見交換する。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書p.76【Q1】を使用。 適宜、配布したリーフレット等を参照させ、活発に意見交換がなされるよう指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 選挙権年齢が引き下げられた理由について、教科書や資料から読み取ることができる。

展開 25分	【ケーススタディ～あなたならどうする】を活用し、個人ワークをもとに、グループワークの実施。		
	<ul style="list-style-type: none"> ・提示資料①～③を読み、各自の立場についての意見・根拠を述べる。 ・ケーススタディについてグループ毎に高校生A～Dの立場に立って、意見交換する。 ・同じグループ内でそれぞれの立場に立って主張した際、どのようなことを考え、感じたのか、再度意見交換をし、用紙にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いくつかのグループに分け、意見交換し考えを深めさせる。 ・生徒のまとめる時間を確保する。 ・考えの理由やその良さなど積極的に他者に説明するよう指導する。 ・配布された用紙にまとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者との意見交換を通して、根拠をもって自分の考えを表現している。 ・他者の意見を否定することなく、協調しながら議論を深めている。 ・発表やワークシートの評価は、ループリックAを活用する。
まとめ 10分	【グループワーク・発表準備】グループ内での意見交換を踏まえて、「国を動かす主権をもつということ私たちににとってどのようなことなのでしょう。」について、改めて考える。		
	<ul style="list-style-type: none"> ・提示資料④「18・19歳の投票率」を読み、各自の立場についての意見・根拠を述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の考えをまとめる時間を確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートでの論点整理、ポスター作成を通して、政治に関心をもつための方策についての意見をもつことができたか。

(6) 本時（全2時間中の1時間目）の振り返り

提示した資料は、「衆議院議員総選挙における年代別投票率の推移」「参議院議員通常選挙における年代別投票率の推移」「第23回参議院議員通常選挙全国意識調査【棄権の理由】」「第24回参議院議員通常選挙年齢別投票者数調べ（18歳・19歳）」を提示した。

「ループリックA」（ケーススタディ）の結果は、以下のとおりであった。

表5 【「ループリックA」…多面的・多角的に考察する力を評価するループリック】

評価規準	評価基準		
	3（十分満足できる）10名/26%	2（概ね満足できる）21名/54%	1（努力を要する）8名/20%
ケーススタディの各高校生の立場・主張について、複数の資料を活用して考察を行っている。	複数の資料を関連させながら、論点を整理しつつ、反証も考慮しながら、適切に読み取ることができる。	複数の資料を関連させながら、論点を整理して適切に読み取ることができる。	一つの資料から、一義的にしか読み取っていない。

ケーススタディを基にして資料を活用しながら、それぞれの高校生の立場・主張について考察できた3（十分満足できる）評価の生徒は、26%であった。

(7) 本時（全2時間中の2時間目）

ア 本時の目標

(ア) 前時に考察した事柄踏まえて、同じ世代の子供たちが主権者としてどう行動すべきか、主権者として自分の考えをまとめ、表現し説明することを通して、主権者としての自覚を養う。

(イ) グループワーク等の主体的・協働的学習を通して、根拠をもって自分の考えをポスターセッションで表現し説明する力を養い、主権者としての資質を身に付ける。

イ 仮説に基づく本時のねらい

前時に学習した事柄を踏まえ、他者と協働した学習や発表活動を通して、学習の振り返りを行い、学習への理解を深め、主権者として、公共的な事柄に主体的に参画し、自らの考えなどを表現することができる。

ウ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入 10分	・前時に学習した事柄について、意見や発表内容を整理する。	・発表内容を整理させ、考えの理由やその良い点などを積極的に他者に説明するように指導する。	
	【小さな問い】主権をもつということはどのようなことか。		
展開 30分	<ul style="list-style-type: none"> ・ポスターセッション A3判サイズのポスターを作成する。 各グループの発表を聞き（2分）、発表後質疑応答をする（1分）。 ・発表内容について、ワークシートにその内容を記入させ、評価させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に作成した資料や意見交換した事柄を踏まえ、主権をもつということはどのようなことか、主権者としてどのように生きていくべきか、各グループの方策について、説明させる。 ・発表内容について、質疑応答を行い、意見交換する。 ・各グループの発表内容を聞き、考えの理由やその良さなど積極的に他者に説明するように指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者との意見交換を通して、根拠をもって自分の考えを表現している。 ・他者の意見を否定することなく、協調しながら議論を深めている。 ・発表や作成したポスターの評価は、ルーブリックBを活用する。
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・発表や意見交換した事柄を踏まえ、課題や自分の考えを用紙にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の考えをまとめる時間を十分に確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表活動等を通して主権者としての素地を形成することができたか作成したポスターやワークシートから判断する。 ・ワークシートの評価は、ルーブリックCを活用する。
	【振り返り】発表・意見交換や複数の資料を活用して、「あなたは主権者として、社会とどのように関わって生きていきたいのか。」自分の考えをまとめてみよう。		

(8) 本時（全2時間中の2時間目）の振り返り

ア ルーブリックによる評価結果

提示した資料は、前時で使用した「衆議院議員総選挙における年代別投票率の推移」「参議院議員通常選挙における年代別投票率の推移」「第23回参議院議員通常選挙全国意識調査【棄権の理由】」「第24回参議院議員通常選挙年齢別投票者数調べ（18歳・19歳）」の他に、「第24回参議院議員通常選挙年齢別投票者数調べ（18歳・19歳）」を提示した。

「ルーブリックB」は、グループ内での意見を踏まえ、「国を動かす主権をもつということは私たちにとってどのようなことなのか。」について、各グループにポスターを作成させ、多面的・多角的に考察した結果(表6)、以下のとおりになった。

作成したポスターから、根拠資料を提示しながら理由を提示しているグループが多いことが分かる。そのため、多面的・多角的に考察できた生徒が増加したと考えられる。

表6 【「ルーブリックB」…多面的・多角的に考察する力を評価するルーブリック】

評価規準	評価基準		
	3 (十分満足できる) 31名/80%	2 (概ね満足できる) 8名/20%	1 (努力を要する) 0名/0%
グループ内での意見交換を踏まえ、主権をもつことは私たちににとってどのようなことか、複数の資料を活用して考察を行っている。	二つ以上の資料を根拠に、主権者として社会とどのように関わって生きていきたいのか、多面的・多角的に考察できている。	一つの資料を根拠にして、主権者として社会とどのように関わって生きていきたいのか、考察している。	資料を考慮せず、主権者として社会とどのように関わって生きていきたいのか、一面的にしか考察できていない。

「ルーブリックC」は、ポスターセッションを行い、その発表活動や意見交換を通して培った事柄を、ワークシートの振り返りを使って表現させた。その結果(表7)は、以下のとおりになった。

表7 【「ルーブリックC」…表現する力を評価するルーブリック】

評価規準	評価基準		
	3 (十分満足できる) 35名/80%	2 (概ね満足できる) 4名/20%	1 (努力を要する) 0名/0%
振り返りにより、主権者として社会にどのようにかかわって生きていきたいのかについて、説明することができる。	学習した内容を生かし複数の資料を活用して、主権者として社会とどのように関わって生きていきたいのか、多面的・多角的に考察・工夫しながら表現することができる。	学習した内容を生かし、一つの資料を活用して、主権者として社会とどのように関わって生きていきたいのか、多面的・多角的に考察し表現することができる。	学習した内容や資料を考慮せず、主権者として社会とどのように関わって生きていきたいのか、一面的にしか考察し表現することができていない。

この結果から、資料の活用を基にしたケーススタディの考察、主体的・協働的な学習、多面的・多角的な考察を引き出す問い、ポスターセッションの活用と発表などから、「主権者として社会にどのように関わって生きていきたいのかについて説明する」ことができた3 (十分満足できる) 評価の生徒は、全体の80%となった。結果、既習事項と新しい情報が結び付き、論点も整理され、根拠に基づいて自らの意見を表現できるようになったと考えられる。

イ アンケートの結果

「主権者として自分の意見を持ち、その意見を選挙などの機会を活用して政治に反映させていきたい。」「自分の意見や考えを伝えることが大事である。」「主権者が意見をもって社会を動かしていかなければならない。」「政治に対しての自分の意見をもつことは、国民としての自覚をもつことだと思った。」「自分が社会の中で生きていくためにも、今から選挙などによって、社会貢献できることを大切にしたいと思う。」など、生徒の多面的・多角的考察を促す主体的・協働的な学習により、深い学び合いの場が生まれ単元の目標達成に近付けたと推察できる。

ウ 仮説の検証

(ア) 仮説1の検証

仮説1については、具体的方策1・2に準じて授業を展開した。主体的個人ワークで自らの意見・主張を確認させた上で、ペアワークを用いて主体的・協働的な学習を実施した。また、ケーススタディを活用して様々な立場・意見の高校生を体感させるためにグループワークを用いながら、社会的事象についての論点を整理させ、思考の道筋をまとめながら表現する機会を設定した。

表 ルーブリック A とルーブリック C の比較

	3 (十分満足できる)	2 (概ね満足できる)	1 (努力を要する)
A	10 人 (26%)	21 人 (54%)	8 人 (20%)
C	35 人 (80%)	4 人 (20%)	0 人 (0%)

ケーススタディを基にして資料を活用しながら、それぞれの高校生の立場・主張について考察したが、ルーブリック A で「十分満足ができる。」生徒は 26%であった。しかし、既習事項と新しい情報を結び付け、論点整理を行い、根拠に基づいて説明することができているかを評価するルーブリック C では、80%の生徒が「十分満足できる。」評価になった。このことは、主体的・協働的学習に対するルーブリック B の結果で 80%の生徒が「十分満足できる。」となっていることから、グループワークを活用した主体的・協働的学習を行うことにより、80%の生徒が資料を活用して、主権をもつことの意義や重要性について、多面的・多角的に考察が行われた結果、根拠に基づいて説明できるようになったと思われる。

(イ) 仮説 2 の検証

ワークシートから、生徒全員が自らの意見・主張をもったこと、他者と自分の意見・主張の共通点・相違点について確認することができたことが読み取れる。また、生徒の自己評価「ケーススタディの中で、複数の資料を参考にして、根拠を明らかにし、それぞれの立場で主張することができた。」の結果では、3 (よくできた) 評価の生徒 9 名 (23%)、B (できた) 評価の生徒が 29 名 (74%) となった。これは、ケーススタディの立場・主張と、自分の立場・主張が合致した場合は上手く考察できていたが、自分の立場・主張と合致しない場合はあまり考察が深められなかったことに起因すると考えられる。そこで、生徒の個人的経験に立脚した考え方だけでなく、他者の立場や客観的根拠に基づいて考察する授業改善が見いだせた。

エ 成果と課題

(ア) 成果

選挙権年齢の引き下げや主権者としての在り方生き方について、諸資料を活用した考察、様々な表現方法を用いた発表や意見交換が展開され、生徒の深い学びができたことから、主体的・協働的学習を通じて生徒の多面的・多角的な考察を進めることができたと言える。

(イ) 課題 (授業改善に向けて)

主体的・協働的学習を通して生徒の多面的・多角的な考察を進めるためには、授業の主題に沿うルーブリックの作成・提示と、生徒の思考に効果的な資料の精選・提示が必要不可欠であることが分かった。授業の主題に沿う効果的な資料を精選し、生徒に提示することで、根拠をもって自分の考えを表現し説明する力を養い、主権者としての資質を更に高めることができたものと思われる。

VI 研究の成果

平成34年度から新しい学習指導要領に改訂されることを踏まえ、新しい時代に求められる資質・能力を育むという観点から、本研究では主体的学習と協働的学習を効果的に組み入れて授業を設計することとし、協働的学習後に生徒が多面的・多角的に社会的事象を考察できるようになったのかを検証した。つまり、与えられた問いに対して、提示された複数の表現が異なる資料を基に自己ワークを行い、さらに、グループワークなどのアクティブ・ラーニングの手法を用いて授業を展開することで理解が深まるのか検証した。

思考の道筋をまとめながら表現する機会を設定することで、生徒が自らの意見・主張をもち、他者と自分の意見、主張の共通点、相違点等について確認しながら論点を整理していることや個人の考えがグループワークを通して変容し、新しい見方・考え方などに気付き、多面的に考えることができ、問いの本質に気付き、自己の考えを形成することができたことが明らかとなった。このことから、学校や生徒の状況、科目や単元などが様々ではあったが、主体的・協働的学習を実践することで、多くの生徒が社会的事象について、既習事項と新しい情報を結び付けて論点を整理することができたと推定できる。主体的・協働的な学習を用いることは社会的事象の多面的・多角的な考察につながるということが分かった。

この多面的・多角的な考察につながるための工夫として、発表・意見交換や複数の資料を活用して、「あなたは主権者として、社会にどのように関わって生きていきたいのか、自分の考えをまとめてみよう。」などの多面的・多角的な考察を引き出す問いやペアワーク、グループワークなどの意見交換の場の他に、コンセプト・マップによる思考の可視化や考察したことをビジュアルに表現したものを基にさらに意見交換をするポスターセッションの設定等が、深い学びには有効性であることが分かった。

また、思考力の他に考察したことを表現する力を評価するルーブリックを使用して、協働的学習後、どの程度、根拠に基づいて説明できるようになったかを評価した。思考段階よりも協働的学習後に考察したことを表現する段階の方が、満足できると評価できる生徒の数が増えているので、協働的学習の有効性が裏付けられた。さらに、思考力を評価するルーブリックと表現力を評価するルーブリックの比較検討をすることと生徒の自己評価を設けることにより、生徒の変容を読み取ることができ、授業の改善点を把握することができた。授業後に自己評価を生徒のワークシートに記入させたところ、生徒の自己評価は「クラスメイトの異なる考えを聞くことができて参考となった。」「自分の意見や考えを伝えることが大事だ。」

「社会の中で生きるためにも社会貢献を大切にしたい。」などの『審議のまとめ』（別添3-2）で提示された公民科において育成を目指す資質・能力につながる効果が確認でき、生徒は授業のねらいや目標を理解し主体的に学習に取り組めたと推察できる。

教員が深い学びにつながる主体的な学び、対話的な学びの仕掛けをつくることで生徒が多面的・多角的に考察しやすくなり根拠に基づいて説明できることが確認できた。また、教員の評価と生徒の自己評価を比較することで、授業の改善点を把握することができ、生徒の実態に即した教材研究、教材開発の一助となると考えられる。

VII 今後の課題

評価面では、評価の手立てとして、「社会的事象について多面的・多角的に考察する力」を評価するルーブリックと、「表現する力」を評価するルーブリックの二つを作ることとした。思考したことと考察内容を表現したことを明確に区分する基準が課題となった。また、「表現する力」とは、『審議のまとめ』の「社会科、地理歴史科、公民科における思考力、判断力、表現力等の育成のイメージ」（別添3-3）の③では「説明したり論述したりできる」力となっているがプレゼンテーション能力などと受け止めてしまう部分も生じた。そこで『審議のまとめ』の（別添3-2）に提示された思考力・判断力・表現力等にならない、考察したことについて適切な資料を根拠として説明することを表現する力と見なすようにした。

評価に利用したルーブリックの段階区分について、程度の基準が教員の主観に依拠する傾向があったので、社会的事象を説明するのに必要な要素に分解するなどして、生徒が説明に使用した要素の数及び、要素と要素のつながりなど客観的な評価区分する必要がある。したがって、あらかじめ社会的事象の説明に不可欠な要素と要素同士の結び付きを確認してルーブリックを作成する必要がある。また、ルーブリックを学習テーマに関する生徒のつまづきを発見して、課題の解消を図り上位の次元に引き上げていくツールとしての活用が十分ではなかった。この場合、授業のどの場面で見取りをするのか検討する必要がある。

授業改善面では、授業の中で学習した知識を使って社会的な課題を解決していく検証授業を実践したが、社会的問題に関するテーマと問いを教員がそのねらいや意義等を十分に説明しないで提示したことで、生徒が新たな課題を発見するまでは到達できなかった。例えば「学習したことで解決できそうな社会問題はないか。」などの発問をして、社会に目を向けさせ、学習内容の有用性を認識させていくことが重要である。この発問から引き出した課題について考えていく学習を次回以降の学習に設定していくことも考えられる。

また、生徒に提示する資料の分量を勘案しないで、1単位時間に二回のアクティブ・ラーニングを実施すると時間に追われ、生徒の理解を十分に確認できない場合があった。このことは、研究主題に基づき社会的事象を多面的・多角的に考察させるために生徒に提示する資料についてねらいに即して精選し、適切な学習過程でアクティブ・ラーニングを設定すれば、生徒の理解を確認しながら授業を進めることができることを示している。また、授業の振り返り段階で、生徒にワークシートに学習内容をまとめさせたり、授業アンケートを実施することで生徒の学習到達度や授業の改善点を把握することができるが、次回の授業につながるようなアンケートの項目にしないと、指導方法を修正し適切な授業計画を立てにくくなる。それ故、次回以降の単元の授業においてどのような問いを設定し、問いを立てるために必要な資料は何かという具体的な改善点までは見いだすことができなかった。したがって、今後の授業改善では、どの単元のどの授業どのタイミングでグループワークなどのアクティブ・ラーニングの手法を用いることが、現実的かつ効果的であるのか単元指導計画を検討していく必要があると考えられる。

「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現には、単元指導計画、単元評価計画を緻密に練り上げていく力が必要であり、単元の基軸となる問いとスモールステップとしての小さな問いとの関係性が重要であると考えられる。

平成28年度 教育研究員名簿

高等学校・地理歴史・公民

学校名	課程	職名	氏名
東京都立南葛飾高等学校	全日制	主任教諭	海洲 安希央
東京都立六本木高等学校	定時制	主任教諭	田中 安輝子
東京都立竹早高等学校	全日制	教諭	米谷 友規
東京都立飛鳥高等学校	全日制	主任教諭	白土 直人
東京都立野津田高等学校	全日制	教諭	浅野 義人
東京都立翔陽高等学校	全日制	主任教諭	◎ 鈴木 高志
東京都立立川国際中等教育学校	全日制	主任教諭	長谷川 俊介
東京都立東大和高等学校	全日制	教諭	水浦 昂

◎ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事 佐々木 純

平成28年度

教育研究員研究報告書
高等学校・公民

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成28年度第142号〕

平成29年3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 株式会社オゾニックス